

ひまわり



令和4年10月24日(月)

自然との共生



近くの田んぼでは稲刈りが終わり、出てきた稲わらを燃やす「わら焼き」の煙が漂っています。秋の風物詩です。

大昔、人々は木の実などを採集したり、動物を狩猟して食料や衣服の材料にしていました。このような社会を狩猟採集社会といいます。しかし植物には豊作・不作があります。狩猟では、獲物が捕れる時もあればそうでない時もあります。食料事情は不安定だったことでしょう。

日本では、縄文時代の終わり頃までが狩猟採集社会でしたが、弥生時代になる頃から人々は農地を耕し、米などをつくる農耕社会へと変わっていきました。米は乾燥させると長期間保存できます。人々は食料の確保ができたことで、冬など食料が少なくなる季節でも安定した生活を送ることができるようになりました。

また、日本を農耕社会として発展させたのは、次の要因もありました。日本の地形は、山から海までの距離が短く、そこにある川の水は急斜面を流れていきます。大雨が降ると川は氾濫し、大量の土砂を下流へと運びます。その土砂がたまったところが、水分や栄養分の多い農耕に適した土地となりました。しかし、川の氾濫は作物を台無しにしてしまうこともありました。

そこで、人々は土地を洪水から守るため、山に木を植え、山の保水力を高めました。このことは、山からの安定した水の供給も可能にしました。古くから、日本に住む人は、稲作に欠かせない水や森林などの自然を大切にしてきたのです。そこには、自然を文明によって支配するというばかげた発想はありません。日本文化の特色は、自然とともに生きる「共生文化」なのです。

時は流れて、現代に視点を移してみましょう。科学技術は日進月歩です。しかし、環境問題は深刻の一途をたどっています。地球温暖化、海洋汚染、森林破壊など。今こそ私たちは、自然との向き合い方をあらためて見直す必要があります。そのキーワードこそが「自然との共生」です。

学校ホームページで、日々の教育活動のようすを公開しています。どうぞ、本校ホームページを閲覧してください。

